

第3部 川原寺の移築

第1章 大和の川原寺

1 川原寺と天武天皇

(1) 「川原寺」とは

「川原寺」は「653年」に初めて『日本書紀』に出てくる。

(孝徳) 白雉四年(653年)六月、天皇、旻法師の命が終わると聞いて使いを遣わし弔(とぶら)う。并て多くの贈り物を送る。皇祖母尊及び皇太子等、皆使いを遣わし旻法師の喪を弔(とぶら)う。遂に法師のために畫工狛堅部子麻呂・鯽魚戸直等に命じて多くの仏菩薩像を造る。川原寺に安置す。(或本に云う、山田寺に在る)

『日本書紀』

「白雉四年(653年)」に旻法師が死去する。旻法師のために「多くの仏菩薩像を造り、川原寺」に安置するという。

次ぎに「川原寺」が出てくるのは「673年」である。「20年」も後である。

(天武) 二年(673年)三月、是月、書生を聚(あつ)めて始めて一切經を川原寺に於いて写す。

『日本書紀』

「673年」に「川原寺に於いて一切經を写す」とある。「673年」は「672年」の「壬申の乱」の翌年である。「673年」は天武天皇の時代である。

天武天皇は「壬申の乱」で勝利すると大和の飛鳥に淨御原宮を造り、住む。「673年」の「川原寺に於いて一切經を写す」とあるのは大和での出来事である。「川原寺」は大和の飛鳥にある。

川原寺について岩波書店の『日本書紀』の「補注」は次のように書いている。

川原寺 飛鳥川の西岸、橘寺のすぐ北にあり、法号を弘福寺（ぐふくじ）という。先年の発掘調査によると（中略）。寺の施設の地下で発見された二条の長大な暗渠は、寺の創立以前の、おそらく斉明天皇の川原宮に関係するもので、宮跡に寺が造られたと考えられるようになった。また当初の瓦の様式などから、寺の創立は天智天皇の頃とみられるから、白雉四年に川原寺があったとするのは無理であろう。（後略）

岩波書店『日本書紀』の「補注」

川原寺は大和の飛鳥川の西岸にある。図 4

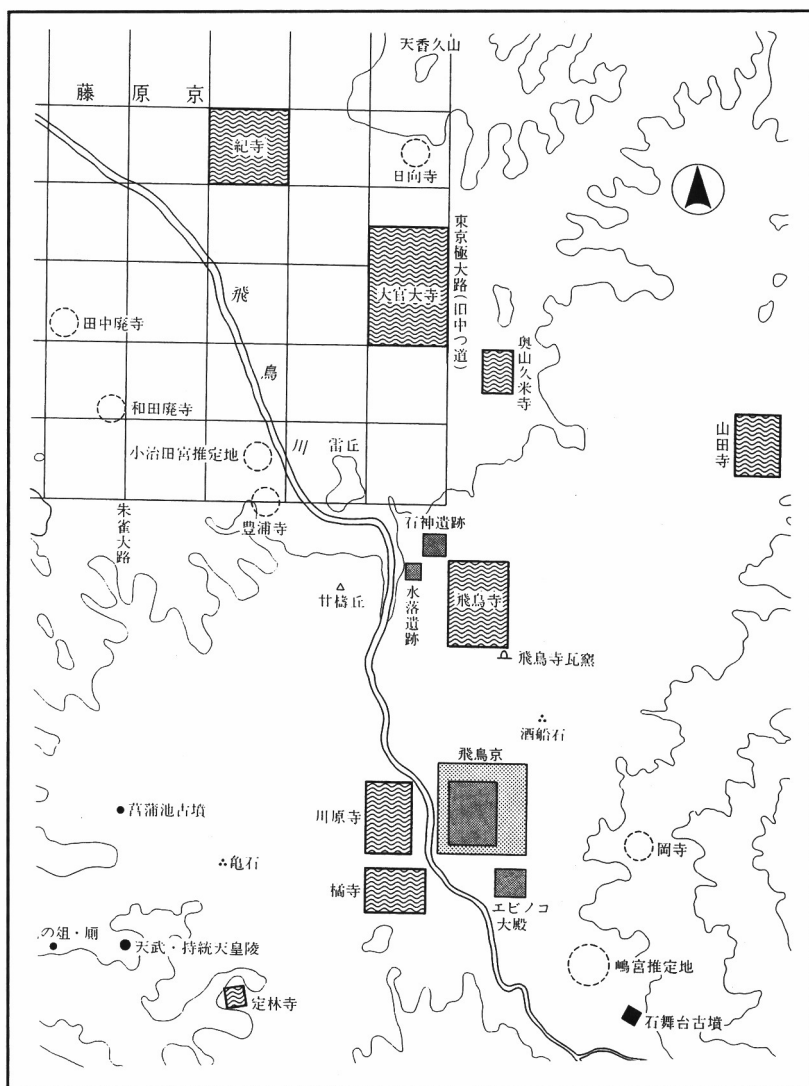
川原寺の発掘調査により、地下に長大な二条の暗渠が発見された。斉明天皇の「川原宮」であろうという。川原寺は斉明天皇の「川原宮」の跡に建てられているという。

出土した瓦から「川原寺」の創立は天智天皇の頃と考えられる。したがって「白雉四年（653年）」に川原寺があったとするのは無理であろうという。

「653年」の「川原寺」は否定されている。「653年」の「川原寺」は存在しないのであろうか。

図 4 飛鳥浄御原宮と川原寺・飛鳥寺

(『飛鳥の寺と国分寺』(岩波書店)より)



(2) 「川原寺」と「川原宮」

川原寺の発掘調査により、川原寺は斉明天皇の「川原宮」の跡に建てられたという。

しかし斉明天皇の「川原宮」は大和にあるのではない。肥前の飛鳥にある。

(斉明) 元年 (655年)、是冬、飛鳥板蓋宮に災 (ひつ) けり。故、
飛鳥川原宮に遷り、居す。 『日本書紀』

飛鳥板蓋宮が火災で焼けたので「飛鳥の川原宮に遷り、居す」とある。飛鳥板蓋宮は「645年」の「乙巳の変 (大化改新)」のときの宮殿である。「乙巳の変」は肥前の飛鳥で起きている (古代史の復元⑥『物部氏と蘇我氏と上宮王家』)。

飛鳥板蓋宮は肥前の飛鳥にある。「川原宮」も肥前の飛鳥にある。『日本書紀』の「飛鳥川原宮」は「肥前の飛鳥の川原宮」である。

斉明天皇はその翌年 (656年) に大和へ移る。

(斉明) 二年 (656年) 九月、是歳、飛鳥岡本に更に宮地を定める。
(中略) 遂に宮室を起こす。天皇、乃ち遷る。号して後飛鳥岡本宮と
曰う。 『日本書紀』

大和の新しい宮殿は「後飛鳥岡本宮」という。「後の飛鳥の岡本宮」である。「後の飛鳥」とは大和の飛鳥であり、「前の飛鳥」は肥前の飛鳥である。斉明天皇は「肥前の飛鳥」から「大和の飛鳥」へ移り、宮殿の名前は上宮法皇 (祖父) の肥前の飛鳥の「岡本宮」を採り、同じ「岡本宮」にしている (古代史の復元⑦『天智王権と天武王権』)。

「川原宮」は斉明天皇が大和に移る前に出てくる。「川原宮」は肥前の飛鳥にある。大和の川原寺を発掘調査して「寺の施設の地下で発見された二条の長大な暗渠」を斉明天皇の「川原宮」であるとするのは誤りである。したがって大和の「川原寺」は斉明天皇の「川原宮」跡に建てられたのではない。

○川原宮と川原寺

- 川原宮 肥前の飛鳥にある
- 大和の川原寺 大和の飛鳥にある

(3) 天武天皇と「川原寺」

「大和の川原寺」とはどのような寺であろうか。

「大和の川原寺」は天武天皇にとって特別な寺である。「(天武)十四年(685年)九月」に天武天皇は病気になる。

(天武)十四年(685年)九月、天皇の体不豫のために、三日、大官大寺・川原寺・飛鳥寺に於いて経を誦(よ)ましむ。因りて稲を以て三寺に納める。各差有り。
『日本書紀』

天武天皇は病気になる。「大官大寺・川原寺・飛鳥寺に於いて経を誦(よ)ましむ」とある。「大官大寺・川原寺・飛鳥寺」で病氣平癒の読経をしている。この「三寺」は「飛鳥の三大寺」と云われている。

翌年(686年)になると天武天皇の病はさらに悪くなり、死を自覚するようになる。

(天武)朱鳥元年(686年)五月、天皇、始めて体が不安。因りて以て川原寺に於いて薬師経を説く。
『日本書紀』

「686年5月」に天武天皇は「始めて体が不安」とある。死を予感したのであろう。天武天皇は「川原寺」に於いて薬師経を説（と）かせている。「薬師経」であるから病氣平癒の祈願であらう。天武天皇は死の不安を覚えると「川原寺」で病氣平癒の祈願をしている。「川原寺」は天武天皇がもっとも信頼する寺であらう。

翌月（686年6月）には飛鳥寺と川原寺で天武天皇の病氣平癒の供養が行われる。

（天武）朱鳥元年（686年）六月、伊勢王及び官人等を飛鳥寺に遣わし、衆僧に勅して曰く、「近者（このごろ）、朕の身は不和。願う、三宝の威を頼りて、以て身体が安和を得るを欲す」という。是を以て僧正・僧都及び衆僧は誓願に応える。（中略）勅して百官の人等を川原寺に遣わし、燃燈の供養をす。『日本書紀』

「朕の身は不和。願う、三宝の威を頼りて、以て身体が安和を得るを欲す」とある。天武天皇の様態はますます悪化する。「是を以て僧正・僧都及び衆僧は誓願に応える」とある。

また「勅して百官の人等を川原寺に遣わし、燃燈の供養をす」とある。天武天皇は「川原寺」に百官の人等を遣わして病氣平癒の祈願をしている。「川原寺」は天武天皇にとってやはり特別な寺である。

天武天皇の病状はさらに悪化する。「686年9月4日」には親王以下、諸臣は「川原寺」に集まり仏に誓願する。

（天武）朱鳥元年（686年）九月四日、親王より以下、諸臣に逮（いた）るまで悉く川原寺に集まり、天皇の病の為に誓願すと云々。九日、天皇の病、遂に差（い）えず、正宮に崩す。『日本書紀』

親王より以下、諸臣は「悉く川原寺に集まり、天皇の病の為に誓願す」とある。その「5日後」の「686年9月9日」に天武天皇は崩御する。

天武天皇が臨終のときにも「親王より以下、諸臣は悉く川原寺に集まり」とある。「川原寺」は天武天皇にとってもっとも重要な寺であることがわかる。

「川原寺」は天武天皇にとって特別な寺である。何故であろうか。

2 川原寺の調査

(1) 川原寺の発掘調査

昭和三十二・三十三年（1957・58年）と昭和四十八年（1973年）に「大和の川原寺」の発掘調査が行われた。『古代を考える 古代寺院』（吉川弘文館）の中で上野邦一氏は次のように述べている。

伽藍配置 伽藍の中央北寄りに中金堂があり、中門の両脇から発した回廊（単廊）が中金堂両脇に取り付いて閉じる。回廊内の西に金堂、東に塔を配して、西金堂と塔は向き合っている。中金堂の北に講堂、さらに北に食堂を配置し、講堂の東西北を僧房が囲む。（中略）

川原寺造営以前と考えられている七世紀の寺院では中心部の伽藍配置は塔を中心とする伽藍で、七世紀末ごろから金堂を中心とする伽藍へと古代寺院の伽藍配置が変遷している。（中略）川原寺の伽藍配置は、塔中心の伽藍から金堂中心の伽藍配置へと移っていく、中間の時期の伽藍の様相をしめす。

川原寺と同じ伽藍配置は見つかっていない。 上野邦一氏

川原寺の伽藍配置は「川原寺様式」と言われており、同じ伽藍配置の寺院は見つかっていないという。

七世紀の寺院の伽藍配置は「塔を中心とする伽藍」であるが、七世紀末ごろから「金堂を中心とする伽藍へ」と変遷するという。川原寺は「塔中心の伽藍から金堂中心の伽藍配置へと移っていく、中間の時期の伽藍の様相をしめす」とある。「川原寺」から伽藍の配置が変化するという。

次ぎに礎石について次のように述べている。

川原寺に瑪瑙の礎石を持つ金堂が建っていたと伝えられていて、事実、現弘福寺の本堂の床下に礎石二八個が残り、すべて大理石の礎石である。飛鳥の地域にある古代寺院の礎石は、ほとんどが花崗岩であり、また川原寺では西金堂・塔・僧房の礎石は花崗岩・安山岩であり、それらと川原寺中金堂の礎石は異なる。 上野邦一氏

川原寺の中金堂の礎石は大理石であるという。その他の建物の礎石は花崗岩や安山岩である。中金堂の礎石だけは特別である。何故であろうか。

次ぎに川原寺の瓦について次のように述べている。

七世紀後半ごろまでは、単弁蓮華文の軒丸瓦を出土する寺院が多いのに、川原寺は複弁蓮華文の軒丸瓦を出土し、はじめて複弁蓮華文を使った寺院である。軒平瓦は重弧文である。 上野邦一氏

川原寺は軒丸瓦に「はじめて複弁蓮華文を使った寺院」であるという。川原寺から軒丸瓦は「単弁」から「複弁」になるという。

(2) 川原寺の造営

「川原寺の造営」については『扶桑略記』に書いてあるという。上野邦一氏は続けて次のように述べている。

『扶桑略記』には、斉明天皇川原宮をのちに改めて川原寺に造り替えているとする。 上野邦一氏

『扶桑略記』には「斉明天皇の川原宮を川原寺に造り替えている」と書かれているという。『扶桑略記』を見てみよう。

斉明天皇 三十九代 女帝 前名皇極天皇

元年十月、飛鳥板蓋宮火災。（中略）天皇遷幸飛鳥川原宮。造川原寺。

二年、造飛鳥岡本宮。又於田身嶺、造兩槻宮。（後略）

『扶桑略記』

「（斉明）元年（655年）十月、飛鳥板蓋宮が火災。天皇は飛鳥川原宮に遷る。」とあり、その後に「造川原寺。」とある。上野邦一氏はこれを「斉明天皇の川原宮を川原寺に造り替えているとする」と紹介している。

しかし前述のように「川原宮」は肥前の飛鳥にあり、「（大和の）川原寺」は大和の飛鳥にある。したがって「天皇遷幸飛鳥川原宮。造川原寺。」を「斉明天皇の川原宮を川原寺に造り替えている」と解釈することはできない。

『扶桑略記』の記事を詳細に検討しよう。

「655年10月」に飛鳥板蓋宮は火災になり、斉明天皇は川原宮に遷るとあり、その後に「造川原寺。」がある。その次は「（斉明）二年」である。「造川原寺。」は「（斉明）元年（655年）十月」～「655年12月」の間であることがわかる。

「10月に川原宮に遷り」、「12月に川原寺」を造っている。「川原宮」を壊して「川原寺」を造るのであれば斉明天皇は住むところが無くなるであろう。

『日本書紀』は次のように書いている。

（斉明）元年（655年）、是の冬に飛鳥板蓋宮に災（ひつ）けり。

故、飛鳥川原宮に遷り居す。

『日本書紀』

『扶桑略記』とまったく同じ内容である。しかし『日本書紀』にはその後に「造川原寺。」がない。斉明天皇はその後も「川原宮」に住んでいるのであろう。斉明天皇が「川原寺」を造営しているのであれば『日本書紀』も「(斉明)元年(655年)」に「斉明天皇が川原寺を造る。」と書いているはずである。

「655年10月」の斉明天皇は肥前の飛鳥に居る。「655年10月」の「飛鳥板蓋宮が火災。天皇は飛鳥川原宮に遷る。」は肥前の飛鳥での出来事である。その翌年の「656年」に斉明天皇は大和へ逃げる。『扶桑略記』にも「二年、造飛鳥岡本宮」とある。

「655年10月」頃の斉明天皇は「肥前の飛鳥」から大和へ逃げる準備をしている時期である。そのような時期に肥前に「川原寺」を造るはずがない。『扶桑略記』の「造川原寺」は斉明天皇ではないであろう。したがって「川原宮」跡に「川原寺」を造っているのではない。

『扶桑略記』の「造川原寺」は誰であろうか。「誰」が、「何処」に「川原寺」を造っているのだろうか。

(3) 川原寺の造営時期

上野邦一氏は川原寺の造営時期について次のように述べている。

川原寺の造営時期は天智天皇が斉明天皇の回復を祈って川原宮跡に造営したとする考えが有力である。しかし、軒瓦の作り方の考察から天武朝とする意見もある。上野邦一氏

「川原寺の造営時期は天智天皇が斉明天皇の回復を祈って川原宮跡に造営したとする考えが有力である」という。「川原寺」は天智天皇が建立したとする説が有力であるという。

しかし『扶桑略記』の「造川原寺」は「(斉明天皇)元年十月」条にある。斉明天皇の「元年(655年)」であるから「天皇」は斉明天皇である。「天智天皇(中大兄皇子)」は「皇子」である。川原寺のような大寺を「皇子」が造ることはあり得ないであろう。「天智天皇が斉明天皇の回復を祈って造営した」とするのは無理であろう。

川原寺の発掘調査から「軒瓦の作り方の考察から天武朝とする意見もある」という。しかし『扶桑略記』は「造川原寺」を「(斉明)元年(655年)十月」と明記している。「655年」は天武天皇の時代ではない。

発掘調査によると「大和の川原寺」の造営時期は天智天皇の時代か、天武天皇の時代であるという。一方、『扶桑略記』は「(斉明)元年(655年)十月」と明記している。どちらが正しいのであろうか。

○川原寺の造営時期

- 発掘調査により 天智朝(662年～671年)か、
 天武朝(672年～686年)
- 『扶桑略記』には 斉明天皇元年(655年)

(4) 川原寺の礎石

奥田尚氏は「鉱物資源の採取と加工」(『日本の古代10 山人の生業』(中央公論社))の中で川原寺の礎石について次のように述べている。

川原寺の礎石

川原寺は飛鳥時代の寺で、明日香村川原に寺跡がある。この寺の中金堂の礎石に「白瑠璃」が使われている。また実見できないが、天

武持統陵とされている野口王墓の石室にも「白瑪瑙」が使われているといわれている。

白瑪瑙といわれている礎石を一つ一つ見ていったのであるが、瑪瑙ではなく、結晶質石灰岩であった。風雨による浸食のためか、表面には凹凸がある。（中略）凸部は白色の珪灰石とよばれる針状の鉱物の集合部である。（中略）結晶質石灰岩を産する場所が多いが、珪灰石を産する場所は少ない。礎石の採取地を求めるには、結晶質石灰岩中に珪灰石、珪岩が含まれ、その産状が似ているところを探せばよい。（中略）大津市石山寺の境内に産する珪灰石は天然記念物に指定されていて、名高い。境内には結晶質石灰岩があちこちに見られ、その中には珪灰石や珪岩が複雑な形で含まれている。この含まれ方は、まさしく川原寺の礎石と同じである。（中略）川原寺の礎石は石山寺境内から運ばれたものであるという結論を得た。

（中略）

南門や回廊の礎石は、（中略）細川谷や飛鳥川の川原に見られる石英閃緑岩と同じである。塔や堂の基壇の化粧石に使用されていた白色の凝灰岩は二上山系の石材である。

奥田尚氏

奥田尚氏は「川原寺」の中金堂の礎石は結晶質石灰岩であり、「滋賀県大津市の石山寺境内から運ばれたものである」という。

何故、中金堂の礎石だけがわざわざ滋賀県大津市の石山寺境内から運ばれているのであろうか。

(5) 川原寺の建築様式

上野邦一氏は『古代を考える 古代寺院』（吉川弘文館）の中の「五 天皇の寺・豪族の寺」で、山田寺の金堂について次のように述べている。

○山田寺の金堂

古代の仏堂は、内側身舎の柱数よりも外側庇（ひさし）の柱数は八つ多いのに、山田寺金堂は外側の柱の数が内側の柱数と同数で、ほかにはあまり例のない特異な柱位置を持つ建物である。

この柱位置から外側のコーナーにあたる隅柱では四五度方向にのみ組物（くみもの）を出す隅一組物と考えることができる。

上野邦一氏

「組物」というのは、深い軒を支える構造の仕組みで柱の上で順次前へせり出していく部材の組み合わせのことである。

「隅一組物」の後に「隅三組物」が登場するという。「隅一組物」と「隅三組物」の寺院について次のように述べている。

○隅一組物と隅三組物の寺院

七世紀の寺院には、飛鳥寺・四天王寺・坂田寺・橘寺・桧隈寺、山城の高麗寺・伊丹麿寺、大津の穴太麿寺、名張の夏見麿寺など、隅一組物を用いるものが相当多くある。

七世紀後半になると川原寺・薬師寺をはじめおそらく大官大寺も隅三組物で、この後の寺院は隅三組物へと展開していく。山田寺は隅一組物の有力な寺院であり、川原寺は隅三組物を用いた最初の寺であると考えられる。

上野邦一氏

「川原寺は隅三組物を用いた最初の寺である」という。「川原寺」から建築様式が新しくなっている。「川原寺」はすべてにおいて画期的な寺院である。

(6) 川原寺の特徴 (まとめ)

上野邦一氏は川原寺の特徴を次のようにまとめている。

川原寺は、中金堂に大理石を使う、軒丸瓦に複弁蓮華文を使う、基準尺度に唐尺を用いるなど、川原寺造営以前の諸大寺と異なり、川原寺の造営が画期的であったと考えられる。

『古代を考える 古代寺院』

川原寺の特徴を箇条書きにすると次のようになる。

○川原寺の特徴

- 川原寺から軒丸瓦は複弁蓮華文になる。
- 川原寺は隅三組物を用いた最初の寺である。
- 川原寺から基準尺度に「唐尺」を用いる。
- 川原寺の中金堂の礎石は石山寺境内から運ばれたものである。

「川原寺」から軒丸瓦も、建築様式（組物）も新しくなる。基準尺度も「唐尺」を使うようになる。古代の寺院建築において「川原寺」は新しいものを最初に採用した画期的な寺である。

この画期的な寺院を誰が建立したのであろうか。

第2章 筑紫の川原寺

1 川原寺と旻法師

(1) 旻法師

川原寺の発掘調査により、出土した瓦から川原寺の創立は天智天皇の頃であるという。そのため「日本の歴史学」は「白雉四年（653年）」の「川原寺」は疑わしいとしている。

『日本書紀』の「白雉四年（653年）」の記事を詳細に検討しよう。

（孝徳）白雉四年（653年）六月、天皇、旻法師の命が終わると聞いて使いを遣わし弔（とぶら）う。并て多くの贈り物を送る。皇祖母尊及び皇太子等、皆使いを遣わし旻法師の喪を弔（とぶら）う。遂に法師のために畫工狛堅部子麻呂・鯽魚戸直等に命じて多くの仏菩薩像を造る。川原寺に安置す。（或本に云う、山田寺に在る）

『日本書紀』

「白雉四年（653年）」の「川原寺」は旻法師と関係がある。旻法師が死去したので「多くの仏菩薩像を造り、川原寺に安置す」とある。そこでまず「旻法師」について調べることにしよう。

「607年」に阿每王権（『隋書』の倭国）は隋へ朝貢する。「608年」に隋は裴世清を阿每王権に派遣する。

「608年」に裴世清は帰国する。このとき阿每王権は学生や学問僧を唐（隋の誤り）へ派遣する。「遣隋使」である。その中に「旻（日文）法師」が居る。

（推古）十六年（608年）九月、唐の客裴世清、罷り帰る。則ち小野妹子臣を以て大使と為す。吉士雄成を小使と為す。（中略）是時、

唐国に遣わす学生倭漢直福因・奈羅訳語恵明・高向漢人玄理・新漢
人大罔、学問僧新漢人日文・南淵漢人請安・志賀漢人慧隱・新漢人
広濟等、并せて八人なり。『日本書紀』

「唐の客裴世清」とあるが「隋」の誤りである。

阿每王権が「隋」へ派遣した学生や学問僧の中に「学生高向漢人玄理、学問
僧新漢人日文（旻）、南淵漢人請安」等が居る。「日文」は「旻（みん）」で
ある。皆「漢人」とあるから中国からの渡来人である。

「618年」に中国の王朝は隋から唐に交代する。

「632年」に「旻（みん）法師（僧旻）」は唐が派遣した高表仁に従い帰
国する。

（舒明）四年（632年）八月、大唐、高表仁を遣わし三田耜を送る。
共に対馬に泊まる。是時、学問僧靈雲・僧旻及び勝鳥養、新羅の送
る使い等は之に従う。『日本書紀』

高表仁は阿每王権に来ている（古代史の復元⑦『天智王権と天武王権』）。
唐と交流しているのは阿每王権である。

旻法師は阿每王権が派遣した学問僧である。阿每王権に帰国するのは当然で
ある。阿每王権の本拠地は筑前の鞍手郡である（古代史の復元⑥『物部氏と蘇
我氏と上宮王家』）。旻法師は唐から筑前に帰国している。旻法師は筑前の人
である。

旻法師は「608年」に隋へ行き、「632年」に唐から帰国している。「2
4年間」も中国で学んでいる。

(2) 「天武天皇の父」と旻法師

旻法師が帰国した「3年後」の「635年」に阿每王権から「天武王権」に交代する。天武王権を樹立したのは「天武天皇の父」である。天武王権の本拠地は筑前の宗像である。「天武王権」は「阿每王権」からすべてを引き継いでいる（古代史の復元⑦『天智王権と天武王権』）。

旻法師や高向玄理も阿每王権から引き継いでいる。「天武天皇の父」は唐から帰国した旻法師と高向玄理を国博士に任命する。

（孝徳）即位前紀（645年）、沙門旻法師・高向史玄理を以て国博士と為す。
『日本書紀』

『日本書紀』は「孝徳紀」としているが、天皇は「天武天皇の父」である。『日本書紀』は「天武王権」を抹殺している。「天武天皇の父」を「孝徳天皇」や「斉明天皇」に書き変えている（古代史の復元⑦『天智王権と天武王権』）。旻法師と高向史玄理は「天武王権」の国博士となり、北部九州（筑前）に住んでいる。

「653年5月」に「旻法師」は病気になる。

（孝徳）白雉四年（653年）五月、是月、天皇、旻法師の房に幸して其の疾を問う。（或本に、五年七月に云う、僧旻法師阿曇寺に於いて病に臥す。是に於いて天皇、幸して之を問う。仍りて手を執りて曰く、「若（も）し、法師今日亡（し）なば、朕従いて明日亡なむ」という。）
『日本書紀』

『日本書紀』は「孝徳紀」として書いているが、天皇は「天武天皇の父」である。天皇は旻法師の手を執り、「若（も）し、旻法師が今日亡（し）なば、朕従いて明日亡なむ」と述べている。「天武天皇の父」は旻法師を篤く敬い、

最高の人物として尊敬していることがわかる。これらは北部九州の出来事である。

注目したいのは「或本」に「五年七月」とあることである。旻法師は「白雉四年（653年）六月」に死去しているから「五年七月」は「白雉五年（654年）」ではない。

「或本」の「五年」とはいつであろうか。「天武天皇の父」の時代であるから「天武天皇の父」の「五年」であろう。天武王権の「年号」は次のようになっている。

○「天武王権」の王と年号

- 僧要 635年—639年 初代 （天武天皇の父）
- 命長 640年—646年
- 常色 647年—651年
- 白雉 652年—660年
- 白鳳 661年—683年 二代目 天武天皇

「天武王権」の「白雉五年」は「656年」である。旻法師は「653年6月」に死去しているから「五年七月」は「白雉五年（656年）」ではない。

旻法師が病に臥したという「五年七月」は「常色五年（651年）七月」であろう。旻法師は「常色五年（651年）七月」に病気になり、「653年6月」に死去しているのであろう。

○旻法師の病気と死去

- 旻法師 病気になる。 常色五年（651年）七月
- 旻法師 死去 白雉二年（653年）六月

これが正しいことを検証しよう。

「改新之詔」が出されるのは『日本紀』の「(天武天皇の父) 白雉元年(652年)」である。『日本書紀』はそれを「(孝徳) 大化二年(646年)」に書き変えている(古代史の復元⑦『天智王権と天武王権』)。

『日本書紀』の「(孝徳) 大化二年(646年)」は『日本紀』の「(天武天皇の父) 白雉元年(652年)」であるから『日本書紀』の「(孝徳) 大化元年(645年)」は『日本紀』の「常色五年(651年)」になる。

○『日本紀』と『日本書紀』の年代

『日本書紀』

『日本紀』

- (孝徳) 大化元年(645年) ⇒ (天武の父) 常色五年(651年)
- (孝徳) 大化二年(646年) ⇒ (天武の父) 白雉元年(652年)

「常色五年」は「651年」であり、「白雉二年」が「653年」である。

旻法師は「常色五年(651年)七月」に病気になる、「白雉二年(653年)6月」に死去している。「或る本」の「五年七月」と一致する。「五年七月」はやはり「常色五年(651年)七月」である。

「或る本」とは『日本紀』ではないだろうか。『日本紀』は「天武王権」の時代は「年号」を用いて記述している(古代史の復元⑦『天智王権と天武王権』)。「五年七月」とは「常色」年号の「五年七月」であろう。

旻法師は「天武王権」の僧である。「天皇」は「天武天皇の父」である。これらはすべて北部九州(筑紫)の出来事である。

「653年」に旻法師が死去すると「天武天皇の父」は旻法師の死を悼み「多くの仏菩薩像を造り、川原寺に安置す」とある。「川原寺」は筑紫に創建されている。

従来は、「白雉四年(653年)」の「川原寺」を「大和の川原寺」であると解釈して、大和の川原寺を発掘調査して「大和の川原寺」は天智天皇の頃の

建立であるから「白雉四年（653年）」の「川原寺」は疑わしいとしている。
それは誤りである。

「川原寺」は二つある。「白雉四年（653年）」の「川原寺」は筑紫にあり、「673年」の「川原寺」は大和にある。

○二つの「川原寺」

- 「653年」ころの川原寺…… 筑紫の川原寺
- 「673年」ころの川原寺…… 大和の川原寺

(3) 「筑紫の川原寺」の創建

天武天皇の父は「仏教の興隆」に力を入れる。

- （孝徳）大化元年（645年）八月、故、沙門狛大法師・福亮・恵雲・常安・霊雲・恵至・寺主僧旻・道登・恵隣・恵妙を以て十師と為す。別に恵妙法師を以て百済寺の寺主と為す。此の十師等、宜しく能（よ）く衆の僧を教え導き、釈教（ほとけのおしえ）を修行し、要（かなら）ず法の如くならしめよ。
- （孝徳）大化元年（645年）八月、凡そ天皇より伴造に至るまで、造る所の寺、営（つく）ること能（あた）わずば、朕皆助け作らむ。今寺司等と寺主とを拝せむ。諸寺を巡行して僧尼・奴婢・田畝の実を驗（かんが）えて盡く顕（あきら）め奏せよ」という。即ち来目臣、三輪色夫君・額田部連甥を以て法頭とす。 『日本書紀』

『日本書紀』は「孝徳紀」としているが、旻法師（寺主僧旻）が出てくる。北部九州の話である。天皇は「天武天皇の父」である。『日本紀』の「天武天皇の父」を『日本書紀』は「孝徳天皇」に書き変えている。

『日本書紀』の「（孝徳）大化元年（645年）」は『日本紀』の「（天武の父）常色五年（651年）」である（前述）。「天武天皇の父」は「（天武の父）常色五年（651年）」に「十師」を任命して「宜しく能（よ）く衆の僧を教え導き、釈教（ほとけのおしえ）を修行せよ」と命じている。

さらに天武天皇の父は「凡そ天皇より伴造に至るまで、造る所の寺、営（つく）ること能（あた）わずば、朕皆助け作らむ」と述べている。「天皇から伴造に至るまで、造る所の寺」とある。「天皇」も寺を造っている。「天武天皇の父」は「川原寺」を造っているのではないだろうか。

「653年6月」に旻法師が死去すると「天武天皇の父」は「多くの仏菩薩像を造り、川原寺に安置す」とある。尊敬する旻法師が死去したので天皇は自分が造った「川原寺」に仏菩薩像を安置しているのであろう。

『日本書紀』では「川原寺」は「（孝徳）白雉四年（653年）六月」には完成しているように思われる。

ところが『扶桑略記』は次のように書いている。

齊明天皇 三十九代 女帝 前名皇極天皇

元年十月、飛鳥板蓋宮火災。（中略）天皇遷幸飛鳥川原宮。造川原寺。

『扶桑略記』

『扶桑略記』には「齊明天皇元年（655年）十月」条に「造川原寺。」とある。「川原寺」の完成は「655年10月」である。「（孝徳）白雉四年（653年）六月」には「川原寺」はまだ完成していない。

そこで『日本書紀』の「（孝徳）白雉四年（653年）六月」条を改めて見てみよう。

(孝徳) 白雉四年 (653年) 六月、天皇、旻法師の命が終わると聞いて使いを遣わし弔 (とぶら) う。(中略) 遂に法師のために畫工狛堅部子麻呂・鯽魚戸直等に命じて多くの仏菩薩像を造る。川原寺に安置す。(或本に云う、山田寺に在る) 『日本書紀』

天皇は「旻法師の命が終わると聞いて使いを遣わし弔 (とぶら) う。」とあり、「遂に法師のために畫工狛堅部子麻呂・鯽魚戸直等に命じて多くの仏菩薩像を造る。」とある。旻法師が死去してから「畫工に命じて多くの仏菩薩像」を造らせている。

多くの仏菩薩像を造るには年月が必要である。「6ヶ月」以上はかかるであろう。「仏菩薩像」が完成するのは「654年」以降である。「多くの仏菩薩像を造り、川原寺に安置す」とあるのは「653年」ではないことがわかる。

「多くの仏菩薩像を造り、川原寺に安置する」のは「654年」以降である。そうであれば『扶桑略記』の「川原寺」の完成は「655年10月」とあるのが正しいことになる。

「多くの仏菩薩像」を造り、「655年10月」に完成したばかりの「川原寺」に安置しているのであろう。「655年」は「天武天皇の父」の時代である。「川原寺」を創建したのはやはり「天武天皇の父」であろう。

○筑紫の川原寺の創建

- | | |
|-----------|---------|
| ■ 川原寺の創建 | 655年10月 |
| ■ 川原寺の創建者 | 天武天皇の父 |

2 天武天皇と川原寺の移築

(1) 筑紫の川原寺と大和の川原寺

「白雉四年（653年）」に旻法師が死去すると「天武天皇の父」は旻法師のために多くの仏菩薩像を造り、「655年」に完成したばかりの「川原寺」に安置している。「筑紫の川原寺」である。

次に「川原寺」が出てくるのは「673年」である。

（天武）二年（673年）三月、是月、書生を聚（あつ）めて始めて一切経を川原寺に於いて写す。『日本書紀』

「673年」に「川原寺に於いて一切経を写す」とある。「672年」の「壬申の乱」の翌年であるから「大和の川原寺」である。

「655年」の「川原寺」は筑紫にあり、「673年」の「川原寺」は「大和の飛鳥」にある。「筑紫の川原寺」の方はその後の『日本書紀』にも、『続日本紀』にも出てこない。出てくるのは「大和の川原寺」だけである。「筑紫の川原寺」は大和に移築されたのではないだろうか。

「飛鳥の三大寺」は「大官大寺・飛鳥寺・川原寺」である。「大官大寺」と「飛鳥寺」は天武天皇が北部九州から大和に移築している（本書）。「川原寺」も天武天皇が筑紫から「大和の飛鳥」に移築しているのではないだろうか。そのため「飛鳥の三大寺（大官大寺・飛鳥寺・川原寺）」は天武天皇にとってもっとも重要な寺となっているのであろう。

(2) 「飛鳥の三大寺」と天武天皇

「飛鳥の三大寺（大官大寺・川原寺・飛鳥寺）」の中でも「川原寺」は天武天皇にとって特別な寺である。それは移築した場所を見ればよくわかる。

図 4 (p 208)

図の中で「飛鳥京（飛鳥浄御原宮）」とあるのが天武天皇の宮殿である。「川原寺」は飛鳥浄御原宮のすぐ西にある。「川原寺」は天武天皇の宮殿の隣に移築されている。天武天皇は「川原寺」を特別な寺としていることがよくわかるであろう。「天武天皇の父」が創建した寺だからであろう。

「飛鳥寺」は飛鳥浄御原宮の真北に移築している。その位置を見ると天武天皇は「飛鳥寺」も重要な寺としていることがわかる。しかし距離は離れている。「川原寺」よりも身近な寺ではないといえる。

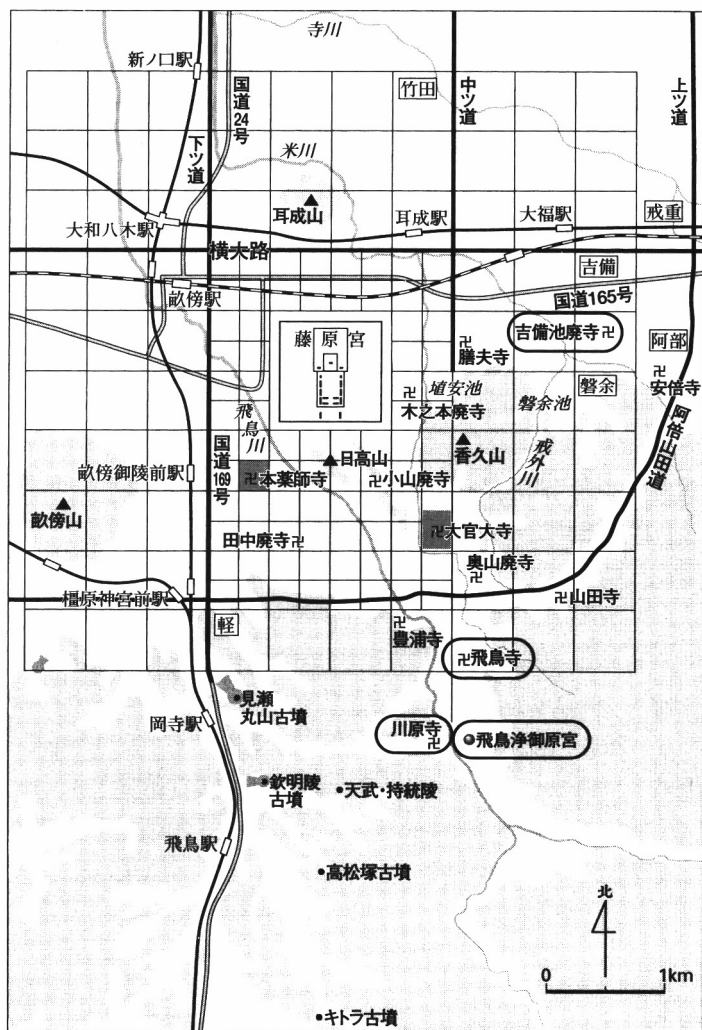
「飛鳥寺」は阿每王権が筑前に創建した「元興寺」である。「635年」に「天武天皇の父」は阿每王権から王権を奪い「天武王権」を樹立する。そのときから「元興寺」は「天武王権」の寺になる。このような背景から「飛鳥寺」も「天武王権」にとって重要な寺であるが、「川原寺」よりも離れたところに移築している。

「大官大寺」は舒明天皇が肥前の神埼郡に創建した「百濟大寺」である。一度火災に遇い斉明天皇が再建する。それを天武天皇が肥前から大和の高市郡に移築して「大官大寺」にしている。

「大官大寺」は敵の「天智王権」が創建した寺である。しかし「九重塔」という日本列島の中ではもっとも大きな寺である。天武天皇は敵が造った寺ではあるけれども最大の寺であることから大和に移築して「大官大寺」にしている。今の「吉備池廃寺」である。図 5

図 5 吉備池廃寺と飛鳥浄御原宮

(『飛鳥幻の寺、大官大寺の謎』木下正史、角川選書)



飛鳥・藤原京と大官大寺・百濟大寺周辺図

「吉備池廃寺（大官大寺）」は「飛鳥の三大寺」の中では飛鳥浄御原宮から最も離れたところに移築されている。敵の「天智王権」が造った寺だからであろう。

このように「飛鳥の三大寺」はすべて天武天皇が北部九州から大和に移築した寺である。

(3) 「大和の川原寺」の創建（移築）時期

「大和の川原寺」は筑紫の川原寺を移築している。その時期はいつ頃であろうか。

「大和の川原寺」は「壬申の乱」後の「673年3月」に初めて出てくる。大和の「川原寺」は「673年3月」には存在している。

天武天皇は「663年」の「白村江の戦い」に敗れて、唐に「筑紫」を割譲して大和へ移住する。大和に入るのは「667年」である（古代史の復元⑦『天智王権と天武王権』）。

天武天皇が大和に「川原寺」を移築するのは「667年」以降である。「673年」には完成しているから「川原寺」が大和に移築されるのは「667年～673年」の間ということになる。

「667年」に天武天皇は大和に入ってもすぐに寺院の造営に取りかかる余裕はない。唐・新羅と戦うための準備が先決である。

その「5年後」の「672年」には「壬申の乱」がはじまる。「壬申の乱」では天武天皇は綿密な計画を立て、十分な準備をしている（古代史の復元⑦『天智王権と天武王権』）。その間に寺院を造営したり、移築するのは無理であろう。「大和の川原寺」は「672年」の「壬申の乱」の後に移築しているのではないだろうか。

そうであれば「大和の川原寺」は「672年～673年」の間に移築されたことになる。

○川原寺の移築時期

■ 移築の時期 672年～673年

(4) 「川原寺」の移築時期の検証

文献から得られた「川原寺」の移築時期は「672年～673年」である。それを考古学から検証しよう。

『奈良国立文化財研究所 年報 1997—Ⅱ』（奈良国立文化財研究所、1997年）に「川原寺の調査」がある。大和の川原寺の寺域西南部を調査している。

川原寺の寺域西南部の調査（1996年2次）

[遺構]

調査によって検出した遺構には、掘立柱建物、掘立柱塀、斜行溝、井戸、土坑などがあり、これらは川原寺創建前後の7世紀代の遺構と、瓦器を伴う12世紀代の遺構とに大別される。

7世紀代の主たる遺構には、斜行溝1、掘立柱建物2があり、掘立柱建物は、斜行溝を埋めた後に建てられている。

斜行溝SD367は、発掘区のほぼ中央を東北東から西南西に走る幅1.7m—3.0m、深さ0.9m—1.4mの断面U字形を呈する大型の素掘溝である。（中略）

下層には7世紀前半の遺物が含まれ、上・中層からは馬の下顎骨や7世紀前半の土器などと共に7世紀中頃の遺物が出土した。

『奈良国立文化財研究所 年報 1997—Ⅱ』

大型の素掘溝である「斜行溝SD367」が検出された。「下層には7世紀前半の遺物が含まれ」という。「上・中層からは馬の下顎骨や7世紀前半の土器などと共に7世紀中頃の遺物が出土した」とある。「斜行溝SD367」は「7世紀後半」に掘られているのであろう。

「斜行溝SD367」からは川原寺の創建瓦も出土している。

[SD367出土遺物]

○瓦埴類

上・中層に川原寺創建の軒丸瓦601型式5点、四重弧紋軒平瓦2点、同心円紋叩き埴1点と創建時の丸・平瓦があり、下層には同心円紋叩き埴1点がある以外瓦類はない。(中略)中層には少量の創建瓦のほかに飛鳥時代の丸・平瓦がある。

○土器類

下層には土師器杯G、杯H、杯C、高杯H、高杯C、(中略)がある。これらの特徴は飛鳥Iの「斜行溝SD02」と一致している。

中層には土師器杯C、杯X、杯G、(中略)などがある。土師器杯CI、須恵器杯類の特徴は飛鳥池遺跡の灰緑色粘砂層の土器群と類似する。『奈良国立文化財研究所 年報 1997—II』

「斜行溝SD367」の「上・中層からは馬の下顎骨や7世紀前半の土器などと共に7世紀中頃の遺物が出土」したとある。また「上・中層に川原寺創建の軒丸瓦601型式5点」が含まれているという。「川原寺の創建軒丸瓦」は「7世紀中頃の遺物」と共に出土している。「川原寺の創建軒丸瓦」は「7世紀中頃」までには造られている。「川原寺の創建」は「7世紀中頃」ということになる。

従来は「大和の川原寺」を発掘調査して「瓦の様式などから、寺の創立は天智天皇の頃とみられるから、白雉四年(655年)に川原寺があったとするのは無理であろう」としてきた。それが誤りであることが発掘調査により明らか

になった。「川原寺の創建」は「7世紀中頃」である。ただし、それは「筑紫の川原寺」である。

『扶桑略記』には「(斉明)元年(655年)十月、飛鳥板蓋宮火災。(中略)天皇遷幸飛鳥川原宮。造川原寺。」とある。それと一致する。『扶桑略記』の記事は正しいことが発掘調査により証明された。

「筑紫の川原寺」の創建は「655年(7世紀中頃)」であり、「672年～673年(7世紀後半)」に大和に移築されたという私の説は発掘調査により立証された。

(5) 川原寺の礎石と「壬申の乱」

川原寺の中金堂の礎石は結晶質石灰岩であり、滋賀県大津市の石山寺境内から運ばれたものであるという。「大津市」は「壬申の乱」のときの「天智王権」の「大津宮」が在ったところである。

「667年2月」に斉明天皇が大和の飛鳥で死去すると、翌月(3月)に天智天皇は即位し、直ちに近江へ逃げる。翌年(668年)には「天智王権」を樹立して「中元年号」を建てて。天智天皇は「上宮王権」を再興したのである(古代史の復元⑦『天智王権と天武王権』)。

これにより日本列島には「天武王権」と「天智王権」が併存することになる。天武天皇はこれに我慢できなくなり、「672年6月」に「壬申の乱」を起こして「天智王権」を滅ぼす(古代史の復元⑦『天智王権と天武王権』)。

天武天皇はその戦勝記念として大津市の石山寺境内から川原寺の中金堂の礎石を「天智王権」の人々に運ばせたのではないだろうか。

川原寺の移築は「673年3月」には終わっている。「672年7月」に「壬申の乱」が終わると川原寺の中金堂の礎石を大津市の石山寺境内から飛鳥に運ばせているのであろう。

「筑紫の川原寺」を大和に移築するのに「壬申の乱」が終わった「672年7月」から「673年3月」までの「10ヶ月」では無理であろう。「川原寺」の移築はもっと前から始まっているのではないだろうか。

天武天皇は「667年11月」に大和に入る。そのときから「宮殿」と「川原寺」をセットで造ることを考えていたのではないだろうか。宮殿の隣に「川原寺」が移築されている。

しかも「川原寺」の門は南門より東門の方が大きいという。東にある宮殿から天武天皇が「川原寺」に出入りすることを考えて東門は大きく造っているのであろう。

「宮殿（飛鳥浄御原宮）」の完成は「壬申の乱」の年の「672年10月」である。

（天武）元年（672年）、九月、嶋宮より岡本宮に移る。是歳、宮室を岡本宮の南に営（つく）る。即、冬に遷り居す。是を飛鳥浄御原宮と謂う。

冬十一月、新羅の客金押実等を筑紫に饗（あ）えたまう。

『日本書紀』

飛鳥浄御原宮は「672年10月」に完成している。「壬申の乱」が終わる「672年7月」から宮殿の造営を始めると「3ヶ月」しかない。「3ヶ月」では宮殿を造るのは無理であろう。宮殿の造営は「壬申の乱」が始まる前から行われている。

「川原寺」も翌年（673年3月）には完成している。「川原寺」の「移築」も「壬申の乱」が始まる前から始まっているのであろう。

九州から寺院を移築するのは容易ではない。特に大寺院の礎石を九州から運搬するのは大変である。「川原寺」の中金堂の礎石は大きすぎて九州から運ぶのを諦めたのか、それとも運んでいる途中で海に落としたのであろう。川原寺が大和に運ばれたときには中金堂の礎石は無かった。そこで礎石になる石を探

していたのであろう。そのとき「壬申の乱」が始まった。「壬申の乱」で勝利すると「天智王権」の石山寺境内の結晶質石灰岩に目を付けて、それを「天智王権」に運ばせたのであろう。こうして「川原寺」の移築は完了した。

「川原寺の中金堂」は「壬申の乱」の戦勝記念の礎石の上に建てられている。

(6) 「筑紫の川原寺」の候補地

「筑紫の川原寺」は何処に創建されたのであろうか。

創建したのは「天武天皇の父」である。天武天皇の父は「百済救援」を決意して宗像から筑紫へ移る。唐・新羅と戦うために太宰府付近（筑紫野市天山）に本陣を構える（古代史の復元⑦『天智王権と天武王権』）。

本陣（筑紫野市天山）の西に天拝山がある。その麓の筑紫野市大宇塔原（とうのはる）に「塔ノ原（とうのはる）廃寺」がある。白鳳時代の寺院跡であるという。今は塔の礎石だけが残っている。巨大な塔心礎には方形の舍利孔がある。

「筑紫の川原寺」は「塔ノ原（とうのはる）廃寺」ではないだろうか。一つの候補地であらう。

（注記）「平城京遷都」のとき飛鳥や藤原京にあった大寺は平城京へ移築された。ただ「川原寺」だけは平城京へ移されなかった。それが謎とされている。「川原寺」は「天武天皇の父」が創建した寺であり、「壬申の乱」の戦勝記念の礎石の上に建てられている。「天武王権」を象徴する寺である。「天智王権」はそれを嫌って平城京へ移築をしなかったのであろう。